

グロテスクな欲望：トニ・モリスン作品における越境と融合

井芹，希依

<https://doi.org/10.15017/1931671>

出版情報：Kyushu University, 2017, 博士（文学），課程博士
バージョン：
権利関係：



氏名	井芹 希依			
論文名	Grotesque Desires: Clashes and Fusion between Incompatible Elements in Toni Morrison's Works (グロテスクな欲望——トニ・モリスン作品における越境と融合)			
論文調査委員	主査	九州大学	准教授	高野 泰志
	副査	九州大学	教授	鶴飼 信光
	副査	九州大学	教授	小谷 耕二
	副査	九州大学	教授	吉井 亮雄

論文審査の結果の要旨

モリスン作品には一般的な「不気味な、恐ろしい、猥褻な」という意味でのグロテスクな描写が非常に多いにもかかわらず、モリスンとグロテスク表象に関する研究は多くない。数少ない先行研究においても、黒人女性文学という狭い枠内に閉じ込める結果にしかないものや、肯定と否定の二極に単純化するだけに終わるものなど、決して十分な内容とは言えない。本論文はそのような研究の不在を埋めるものであり、モリスン文学全般に対する新たな解釈を提示するものである。

本論文ではまずは定義の曖昧な「グロテスク」という用語を、「価値をあいまいにするもの」を本質とする概念として定義し、善悪の二項対立などでは捉えきれない複雑な価値観を表現するものとして捉える。そして特に、暴力、食欲、性などの、他者との身体的関係における欲望を「グロテスクな欲望」と定義する。本論文の目的は、モリスン作品におけるグロテスクな欲望が既存の価値を解体する仕組みを明らかにすることにある。このグロテスクな欲望は、善／悪、生／死、愛／暴力、動物／人間、そして黒人／白人といった二項対立の境界を無効化する、越境的な性質を秘めている。そして様々な形態のグロテスクな欲望の中で、女性登場人物たちが抱く他者との融合への強烈な欲望は、とりわけモリスン作品において何度も繰り返し描かれるモチーフである。本論文は、このモリスン自身が作品の一貫したテーマであると主張する「愛とアイデンティティの追及」をモリスンの創作の根源に位置づけ、他者との融合のモチーフを分析している。

第一部「ヴァージニア・ウルフとウィリアム・フォークナーとの間テクスト的なつながり」では、モリスンが修士論文で扱った二人の作家の作品と対照させてモリスン作品を読み解き、モリスンのグロテスクのテーマを相対的に論じる。第二部「一貫した自己を求めて—女性登場人物の鳥の表象」では、モリスン作品における女性主人公たちが、「野生」というグロテスクな特徴を取り戻すことで一貫した自己を取り戻す過程を検証している。第三部「食の女たち—食の表象」では、グロテスクな欲望としての食の表象が、階級、人種、ジェンダーの社会規範に加え、自己と他者の境界までもあいまいにする力を発揮することを明らかにしている。

本論文が結果として明らかにしているのは、モリスンが男女の対立と葛藤を描きながら、自己と他者の境界のあり方を模索した、ということである。自己と他者の融合は、理想的な状態として描かれながらも長続きせず、常に他者への依存と自己の喪失の危険をはらんでいる。モリスンは、他者からの自立と他者との融合の間の葛藤を描き続けた作家であると結論づけている。

従来のモリスン研究は人種問題を中心に論じられることが多く、黒人文学という狭い枠内でしか捉えられていなかったが、本論文は別の切り込みからこの作家の新しい側面をあぶり出していると

いえるだろう。

以上のように本調査委員会は本論文の提出者が、博士（文学）の学位授与にふさわしいことを認める。